



— NPO法人代表

産みたい人が安心して  
産める社会にし、日本中を  
お父さん・お母さんと  
子どもたちの笑顔で  
いっぱいになりたい

NPO法人  
第3次ベビーブームプロジェクト  
推進委員会代表理事

## アディックス 浅野純子さん

Junko Asano  
1976年、千葉県生まれ。  
「仕事と子育ての両立」  
「安心して産み、育てられる社会」を  
目指し、セミナーや講演会、  
企業へのコンサルティングなど  
幅広く活動。2010年11月に女児を出産。



1 「子(5)」が「いっぱい(18)」として、5月18日を「ベビーブームの日」と制定。'09年5月18日に「第一回ベビーブームの日フォーラム」を開催。基調講演は元・内閣府特命担当大臣(少子化・男女共同参画)の衆議院議員・猪口邦子氏が務めた。2 同委員会のパンフレットとバッジはカラフルで楽しいイメージ

- 01年 アメリカの大学を卒業。同時多発テロの影響で急ぎ帰国し、メーカーに入社
- 02年 投資会社に入社、仕事に明け暮れる日々
- 06年 退職し、日本在住のドイツ人男性と結婚。株式会社キャリアを立ち上げる
- 09年 「第3次ベビーブームプロジェクト推進委員会」設立



3 地域ごとにリーダーを置き、月2〜3回ペースで開かれる「シスターズカフェ」。現在は銀座、有楽町、白金、麻布で行われている。詳しくは同委員会のHPで。http://www.bbproject.jp  
4 11月17日、参議院議員会館内で開催された「交通基本法フォーラム」では、妊産婦・乳幼児連れの視点から意見を発表。優先席の対象となっている人々専用車両の発足も働きかけている



第一次ベビーブームといわれた1949年の出生数は約269万人。第二次の1973年は約209万人。その後、年々出生数は減少し、2008年はおよそ109万人に。深刻な少子化に歯止めをかけるべく活動しているのが、NPO法人「第3次ベビーブームプロジェクト推進委員会」だ。

「現在、第二次ベビーブーム前後に生まれた団塊ジュニアが出産適齢期を迎えています。つまり、第三次ベビーブームが自然に起こる可能性はとても高いということ。実際、理想の子どもの数は30年前とほぼ変わらないというデータもあるくらいです。それなのに、少子化は進む一方。それは、今の日本が産みたくても産めない社会になっているからではないでしょうか」

浅野さん自身、それを実感したひとりだ。30歳まで働いた会社は少人数のブティックファームということもあり、残業は当たり前。週末も出勤することが少なくないなど、家庭との両立が難しい状況。実際、子育てしながら働いている女性社員は皆無だったという。

「結婚して、出産して、仕事もして。私が望むライフスタイルは、その会社ではない。そうでもない。そこで退職し、家庭との両立ができる企業に再就職をと思ったのですが書類選考で落とされるのが大半。面接までこぎつけても「出産しても働き続けられますか」と質問すると、気まずい空気が流れるんですね。約100社応募しましたが、どこも似たような対応で。子どもも仕事もというのは大それた望みではないはずなのに、それすら受け入れられない社会ってどうなのだろう。それが活動を始めるきっかけになりました」

### 声をあげること 社会が変わるかもしれない

まず立ち上げたのは、子育てしながら働く女性を支援する会社。ワーク・ライフ・バランスのコンサルティングや仕事と子育てを両立する女性たちとの情報交換を行うサイトを運営するなかで、浅野さんは、子供を産むことを阻む新たな問題に出合う。

「交流会に遅刻してくるママがとて多かったですね。理由は、ベビーカーでのアクセスの不自由さ。最寄り地下鉄駅から徒歩1分と表示されているお店でも、エレベーターがある出口が遠くて何十分もかかってしまったり。世の中には子ども連れや妊婦にとつて厳しい状況が多々あるんだと驚きました。なのにそれが認められてしまっている。それは、誰も声をあげないからだと思います。私たちが声をあげることで、小さな波が起これば、その波がいつか大きな流れとなって、安心して子どもを産み、育てられる社会になれば……。そう願ってNPOを発足しました」

### 妊娠の機会を逃さないよう 正しい知識を広めたい

同NPOが行なっているのは、デパートやレストランなどに、最寄り駅のホームからベビーカーでのアクセス方法をHPなどに表示してもらう「ベビーカーアクセス運動」や、先輩ママと将来のママなどが交流を図る「シスターズカフェ」といった「子育てを楽しくする&子育ての楽しさを伝える」こと。そしてもうひとつ「妊娠・出産のための正しい知識を広める」ことがある。

「実は私、不妊治療を受けていたんですよ。その気になればいつでも産めると思っていたので、不妊症と告げられたときはショックでした。治療を受けるようになって、あらためて妊娠や身体のことを聞き、「もっと早く知っておきたかった」と痛感しました。結局私は、妊娠するまで4年かかりましたから。そこで2010年から、将来子どもを思っている女性に向けたセミナーも始めました」

精神的にも肉体的にも、金銭的にも負担がかかる不妊治療。それを乗り越え、浅野さんは、11月に女児を出産。「どうやったら、この存在を愛しいと思わずにいられるのかというほど、可愛くてしかたがありません」

子育ては大変だけど、楽しいこともたくさんある。今後は、それを自ら広めていくことになりそうだ。